おうとう優良品種群紅シリーズの育成による産地振興

石黒　亮　氏（６１歳）
東北農林専門職大学　准教授
（元山形県庄内総合支庁産業経済部
農林技監兼農業技術普及課長）

１　業績の概要

背景

日本のおうとう栽培は、かつては加工向け品種「ナポレオン」が主流であったが、加工需要の急激な減退と共に食味重視の「佐藤錦」への転換が進んだ。その結果、収穫・販売時期が６月中旬に集中することとなった。さらに、輸入自由化に伴い国産品の競争力強化が喫緊の課題となる中、生食需要の高まりを背景に、新たに開発するおうとうの品種には、収穫期の分散、優れた食味、果肉の硬さによる扱いやすさ、自家和合性といった多様な特性が求められるようになった。

研究内容・成果

おうとう育種の交雑から選抜、現地適応試験、品種登録申請、普及に至るまでの一貫した育種プロセスを主導し、特に、それまで未解明だった主要形質（果肉色、果肉硬度、成熟期、自家和合性）の遺伝様式を解明し、科学的かつ実践的なおうとうの育種技術を確立することで、おうとうの育種効率を飛躍的に向上させた。早生の「紅さやか」から晩生の「紅てまり」まで収穫期の異なる6品種から成る「紅シリーズ」の育成によって、６月中旬に集中していた収穫期は、５月下旬から７月中旬まで分散し（図１）、産地における労働負荷と経済的リスクの軽減が可能となった。中でも「紅秀峰」は、大きさ・食味ともに高く評価され、「佐藤錦」に続く次世代の主力品種に育っている。また、「やまがた紅王」（図２）は大玉で収穫効率が良く、硬肉で高温でも軟化しにくいことから、労働力不足や気候変動といった新たな社会的課題に対応可能な品種としておうとう関連産業の持続的発展を牽引している。

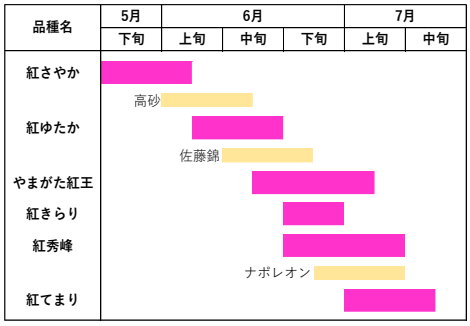

図１　「紅シリーズ」品種の収穫時期

図２「やまがた紅王」

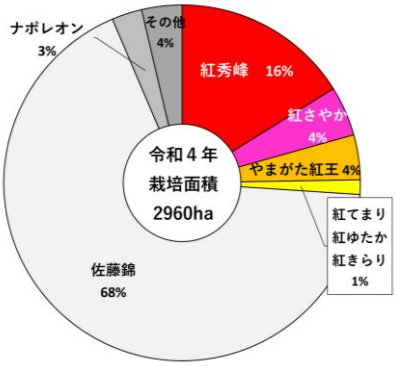

図３ 山形県のおうとう栽培面積と品種構成

普及状況

山形県のおうとう栽培面積は昭和61年の1,620haから令和４年には2,960haへと増加しており、「紅シリーズ」はこのうち740haで、全体の約25%を占めている（図３）。これらの品種は、他家受粉が一般的なおうとうにおいて、主力品種の「佐藤錦」に花粉を供給する「受粉樹」としての役割や、各品種が持つ安定した結実特性により、おうとう全体の結実の安定化に寄与し、令和４年の山形県のおうとうの産出額は378億円に達している。また、「紅シリーズ」は、全国の主要なおうとう産地にも広がっており、「紅秀峰」は北海道や山梨、秋田など全国で548ha栽培されている他、自家和合性の「紅きらり」は全国でこれまで3万本以上の苗木が販売されている。

２　評価のポイント

「紅シリーズ」は、気候リスクへの対応、労働力不足の解消、結実安定等のおうとう栽培における多面的課題の解決に寄与しており、農業現場のニーズと時代の要請に的確に応えている。また、おうとう収穫期の長期化による観光客誘致や産直販売の増加に貢献しており、地域経済全体に対して多大な波及効果をもたらしている点も高く評価した。

【連絡先】山形県農業総合研究センター
（住所：〒990-2372　山形県山形市みのりが丘６０６０－２７　TEL：０２３-６４７-３５００）